

文房四宝

資料提供

(株) 宝研堂

【第十七回】「硯の基本的な使い方と手入れ方法」

◇はじめに

書道において欠かすことのできない文房四宝(筆・墨・硯・紙など)について、基本的な知識を中心に連載しています。第十二回(令和七年三月号)では、中国と日本の硯の近代化について解説しました。今回は、硯の基本的な使い方と手入れの方法を述べます。

◆書道における硯の役割

書道において硯は、書の表現性を高めるために重要な役割を担っています。墨液を自由自在に磨れるようになれば、表現に深みや奥行きが加えられ、作品制作に多様性が生まれます。しかし、扱いに慣れていない方には、硯の使い方や手入れ方法がわからないこともあると思います。今回は、基本的な使い方などについて、書道の初心者向けに詳しくご紹介いたします。

■硯の使い方

硯を使う目的は、紀元前の時代から変わっていません。それは「墨を磨り、墨液を作ること」

です。また、墨を磨りながら感じる「音」や「感触」、そして墨液の変化を楽しむことができるのも、硯の魅力の一つです。

一、墨の磨り方

硯を使用する際は、まず墨と水を準備しましょう。次に、硯の上に少量の水を垂らします。この時に水が多すぎると、墨が水に漬かりすぎてしまい、墨が傷む原因になるため、水は少なめにしましょう(写真1)。

そして水を少しずつ加えながら、墨で硯の面を軽く円を描くように磨り始めます(写真2)。磨る時に肝心なのは、「力を強くかけない」とことです。墨を持つ手の自重程度の加減がちょうど



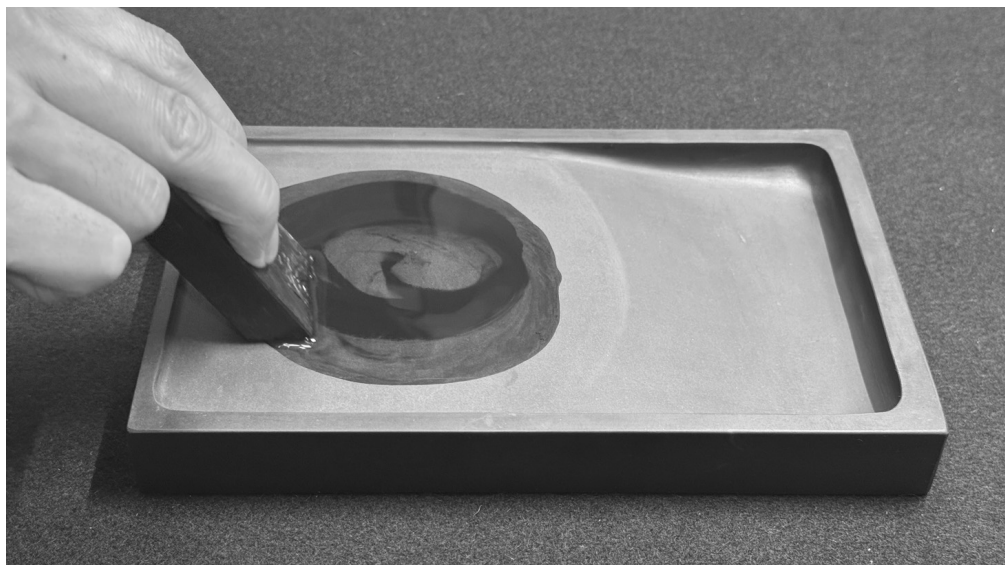
【写真1】墨についた水分はよく拭き取る

どよいでしょう。また、墨を硯に当てる角度は、最初のうちは斜めに当てると硯によく引っ掛かるため、磨りやすくなります。この時の「シャッ」という音で、硯の石の質感を感じとれると思います。

磨り続けて墨の色がだんだん濃くなってくると、音がしなくなります。さらに磨りすすめると墨の粘度が上がり、硯の石の地肌が見えるくらいの濃度になります。

どこまで墨を磨るか、磨るのをやめるタイミング

ングは、自分にとって適切な濃度になった時です。よい頃合いと思われる段階で、墨液の粘度が自分の好みにあっているか試し書きを行い、調整が必要な場合は再度水を加えるか、磨り足すとよいでしょう。



【写真2】力はこめずにゆっくり磨る

二、墨の量

自分ではたくさん磨ったつもりでも、大筆などを浸した時に穂首が墨を吸うことで、あっという間に墨液がなくなってしまうように感じるかもしれません。筆に十分に墨が含まれている状態を作るためには、「少し多めに墨液を作る」気持ちで磨るとよいでしょう。

墨を磨りながらその都度試し書きをして、文字を書くのに最適な濃度と量を見つけることが何よりも大切です（写真3）。



【写真3】必要に応じてその都度試し書きを行う

三、書き始め

磨り終えたら、筆に墨をしっかりと含ませて書き始めます。筆の持ち方や筆運びも重要ですが、まずは墨の濃淡を調整するため、よく磨れているかを確認しましょう。また、書いている間に墨が濃くなったと感じる時がありますが、これは水分が蒸発したためなので、この場合には水を追加し磨り足して調整します。

■硯の手入れ方法

硯の寿命を延ばし、その性能を維持するためには硯を使った後に正しく手入れをすることが非常に重要です。使用後の手入れが不十分だと、次の使い心地に大きく影響してしまいます。

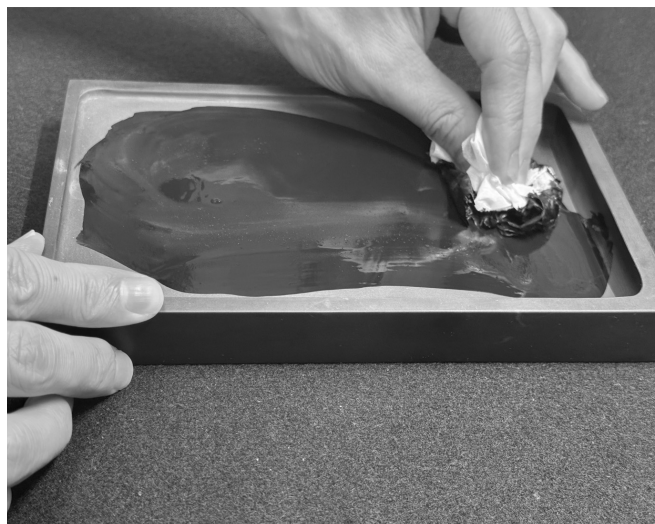
一、使用後の手入れ

硯を使い終えたら、まず墨を硯から除去することが必要です。特に、墨は乾くと取り除きにくくなるため、使用後は早めに拭き取りましょう（写真4）。また、湿らせた布を使ったり水で洗い流すこともできますが、布などで拭う際は力を入れすぎず、強く擦らないように注意しましょう。墨を磨る面を強く擦ると、磨りおろすための「鋒鉋」が弱くなる場合があります。

なお、墨が完全に乾く前に手入れをするのが理想ですが、固まってしまった場合は食器を洗



【写真5】40度前後のお湯で洗い、よく乾かす



【写真4】墨が固まる前に早めに拭き取る



【写真6】泥砥石を使う場合は、墨を磨る要領で優しく研ぐ

う程度の温度（40度前後）のお湯で洗うと取り除きやすくなります。その際も優しく扱うように心掛けてください（写真5）。また、湿ったままにしておくと硯にカビが発生する恐れがあるため、洗った後はよく乾燥させましょう。

二、長期間使用しない場合の保管方法

硯を長期間使用しない場合は、適切な環境下で保管することが大切です。湿度が高い、または乾燥した場所で保管すると、硯がひび割れたり、付属の木箱などが縮み歪んでしまうことがあります。人が快適に暮らせる程度の湿度（40～60％）の環境が、硯の保管にも適しています。

三、硯の磨き方

硯を愛用していると、硯面（けんめん）に墨が付着しやすくなります。ただし、汚れが気になる場合は、洗剤などを使わずに「お湯」で洗いましょう。また、洗浄の際に鋭利な道具や硬いブラシを用いると硯の表面を傷つけてしまう恐れがあるため、使用は控えたほうが無難です。

なお、長年使用していると硯面の鋒鋭が摩耗して墨がうまく磨れなくなる（弱くなる）ことがあります。「なかなか墨がおりない」「ツルツルする」という感覚がサインです。この場合は、市販の泥砥石（どろとじし）を使って硯を「研ぐ」ことで、硯の機能を復活させることができます。

硯を研ぐ時は水を張り、墨を磨る時と同じ要



【写真7】硯の中でも素材、作ともに貴重とされる古端溪老坑

領で泥砥石で研ぎ、硯面がツルツルしなくなったら完了です（写真6）。難しい作業ではありませんが、専門店で泥砥石を購入する際に説明を受けるとよいでしょう。

硯の連載のまとめとして使い方と手入れ方法について述べました。硯は墨を磨るための道具として実用を目的に誕生し、その後文化や芸術の観点において鑑賞的、哲学的に「独自の」発展を遂げてきました。ここでいう独自とは、「素材」のことといえるでしょう。とりわけ石については自然に生成された石自体の美しさを情緒深く楽しむことも含めて、作硯に取り入れられてきました。例えば「古端溪老坑」（写真7）などは硯の中でも王といわれる佳材です。この硯は石紋の美しさ、石の機能性の価値を最大化できるような工夫された姿だと思っています。

また、「硯で墨を磨って誰かのために字を書く行為は、手料理をふるまうことに似ている」という言葉があります。硯は上手に使うことで集中力を高め、表現の担い手として書き手の心に寄り添い、多くの恩恵をもたらしてくれます。昨今「手書き離れ」が進んでいますが、年賀状などで用いる小筆なら、磨墨に時間は要しません。本連載が硯の活用にあたってお役に立つことを願っています。